明治初期翻訳文学の研究

柳田泉

著者略歴

明治二七年青森県弘前市に生まる。
大正七年早稲田大学文学部卒業。
現在、早稲田大学文学部教授・文学博士。

主要著書

『明治文学叢刊』（松柏館）
『随筆明治文学』（春秋社）
『坪内逍遙』（竹内氏共著富山房）
『幸田露伴』（中央公論社）
訳書『カーライル全集』（春秋社）

現住所　三鷹市深大寺三九一四

昭和三六年九月一五日　第一刷発行

明治文学研究　第五巻

明治初期翻訳文学の研究

著者© 柳田泉

著者との協定により検印廃止

¥ 1500

発行者　神田竜一
東京都千代田区神田宮本町一〇

印刷所　精文堂印刷株式会社
東京都荒川区尾久町二ノ四五一

製本所　小林製本所
東京都千代田区神田猿楽町二ノ三

発行所　株式会社　春秋社
東京都千代田区神田宮本町一〇
電話神田㊀六五七五・四七一五
振替口座東京二四八六一

落丁・乱丁本はお取り換えいたします。

N. D. C. 904

はしがき

「明治文学研究」の第二回目の刊行として、第五巻のこの書、すなわち「明治初期の翻訳文学」を出すことになった。これの初刊は昭和十年二月であり、もともと一千部限定の出版であったから、発行書肆にはとっくになくなったのみならず、近ごろは市場の古本屋あたりにも極めてまれになって、元来、十円の定価のものが、次第に高くなって、何百円、或いは千円以上という法外の高値となった。高値は仕方のないことであるけれども、本がなくなっては、読む人々、研究する人々が困ろう。ここでもう一千部出しておけば、あと当分は、またそれらの人々の便利となろうというので、これを復刊することにした。

復刊に当って、文章全体を出来るだけ当世風にしたほか、内容にも多少の増補訂正を加えた。増補のおもなところは、織田純一郎のところと森田思軒のところである。それから沙翁文献を伝記篇の前にもって来て、やや歩調をそろえた。年表にも能う限り増補の筆を加えた。

この書が初めて出たときは、これをもっとひろげていろいろなテーマを盛ったものを幾冊か出す腹案を立てていたものである。近代日本文学に対する翻訳文学の影響（内容、文体、思想、技巧などの諸点から）、もっと一般的な外国文学移入の歴史、それから単に翻訳文学といわず、硬いものもふくめたもっと広い翻訳史などが、私の腹案中にあった。例えば、この後者では、明治の翻訳と文部省の関係、日本百科全書の研究な

ど、そのころの文部省のインテリ的役割を考えて、ぜひやりたいと思っていたものであった。そうしてより、いろいろな思いつきや資料や、その他の何かを少しずつたくわえつつあった。それで、今日この書を復刊する機会にめぐまれた以上、その幾分を利用して、全面的に新しく書きかえた方が何よりも望ましいのであるが、さてそれが出来ない。出来ないというのは、先度の大戦争で、そんな書きつけも資料も、何もかも皆焼やけてしまったからである。そのころの腹案はぼんやりと夢のように時々頭に浮かぶことがあっても、肝腎の資料が一空に帰したのであるから、それをたぐってまとめるということは、なかなかむずかしい。もう十年、二十年若かったら、奮発して研究費を工夫して、もとの腹案の実現にかかるという元気も出たろうが、今となっては遅い。日暮れて道遠し、昔の人はよくいった。私は、旧著を出来るだけよいものにしただけで満足するほかはなかった。地味な、はえない研究で、見た目よりも金も時間もかかり、さて出来上っても、世間であっと喝采するほどの華々しいものにはならない。だからやりたがらない人が多いが、しかし比較文学研究の空気も次第に強まってきたし、追々は若い人々の間から今度は、本式な研究者が出てくるのではないか。私は強く明日に希望をつないでいる。

しかし明日は明日である。若い人々のものである。私はやはり今日の残された時間をつかって、それ相当の勉強をすべきであろう。先輩介山居士は歌っていう、丁寧にす今日の事、明日は白雲の間と。その白雲の間に入らぬうちに、この書の背景をなす西洋文学移入史について、私の知っている限りのことを、よし雑記の形でも今一冊書き残しておきたい。それが、やがて「明治文学研究」の第六巻となることであろう。

この書をかいていたころは、明治文化研究、または明治文学研究の草創時代といってよく、翻訳文学とはいっても、どんな書物がどれほどあるのか、一向わからず、私どもは先輩のあとについて、入門書も手引も

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

年表も書目もなしに、無我無中、文字通り書物を掘り起しつつわが研究をまとめたものである。吉野作造、宮武外骨、尾佐竹猛、石井研堂などの諸氏は私のこの書の成立に並々ならぬ好意を与えた人々、神代種亮（たねあき）、石川巌、斉藤昌三、木村毅などという人々は、私の研究上の先輩または同志として、この書の読者にはぜひとも記憶してもらいたい人々である。しかもその多くはすでに黄土の人となり、残っているのは斉藤、木村の二兄あるのみ、まったく感慨無量というのほかない。

最後に一つ申し添えておく。前方、この書の批評のうちに、翻訳の原本の文献的記述に粗略なのをとがめる声があった。これは大きにもっともな批評だが、実はこれは、批評者がこのころの翻訳書の原物なりその内容なりについての知識が少ないところから来ているので、私の好悪で粗略にしたのではない。このころの翻訳書と今日のそれと同一視されては大分ちがう。それはこの書をよく読めばわかってもらえると思うが、明治初期の翻訳文学書は、原本の何年刊、第何版をどんな経路で入手し、どんな態度で訳したかということなどをまるっきり書いていないものが多い。かつそのとき使用の原本に接するということがほとんど出来ないので、研究者としても手のつけようがなかった。この復刊で能う限りその辺の注意もしたが、しかし大した効果はなかったようである。まず私としては、原本原作者の何かということをつきとめるのに精一杯であったわけで、先人研究家の多少の誤謬を正すというくらいで満足するほかはなかった。その点は、これを機会に、これからも気をつけていくが、読者諸氏にも示教をお願いしたい。

昭和三十六年二月二十八日

柳田泉

（附）序　（昭和十年初刊本）

この頃、少々わけがあって木崎好尚氏の『頼山陽全伝』や森田思軒の『頼山陽及其時代』などを読んでみたが、あの通り文名一代を掩うた山陽でさえ、その畢生の心血を傾注した『日本外史』を生前上木する機会を遂に得ていない、よし『日本外史』の上木には、幕府の思惑という特殊な理由から時機を待たなければならなかったにせよ、その生命の一半たるべき自分の『詩文集』さえ存分なものの刊行を生前見ることが出来なかった、そういうことを考えて、古来学者なるものの恵まれぬ境涯を想い、悵然悲凉の感を催うしたことであった。しかるに、今や私は、山陽死没の年に比すれば真の少年といってもよい今日、早くも過去十数年明治文学研鑽の成績をこういう堂々たる book form にまとめて世に問う機会を得た。この点で、私はつくづく貧寒な一学徒たる自分の望外の幸福というものをありがたいと思う。

この幸福を思うにつけても、私は十余年の研鑽中に私を誡励し、奬誘し、啓導して、つぶさに懇情を示していただいた先輩友人同遊諸氏に謝すべき多くのものをもっている。特に長い間私の研鑽を見護っていて下された吉野作造博士（私はあえて故の字をつけない）、聖経にいう「盲者の相」の如く私の傍杖となって来てくれた木村毅君、無尽蔵の処女鉱ともいうべき明治文庫の資料を私の自由な使用に任せた宮武外骨氏にまず謝意を表する。その他斯の道の先輩たる石川巌、斎藤昌三両氏、尾佐竹猛博士を首班とする明治文化研究会の諸氏にも負うところが多い。これまた感謝の意を表しなくてはならぬ。その他有名無名幾多の謝すべき人々がある。最後に、友情の二字に打算を一擲して快くかかる不利得的な出版に着手した神田豊穂君の雅懐もまた、当然私の感謝をわかつものでなければならぬ。

ただはずらくは、これら諸氏の懇情の深厚に対して、私の業績が果してどれだけの学的価値をもち得るのか、それは疑いなきを得ない。学は独創を貴ぶという、その点よりせば、私の書物は、私が資料を集め、私が選択し私が案を立て、私が按排し、私の頭で記叙論断したという点で（幾多の欠点があろうにも係らず）、若干の独創が無しとせぬらしい。公然取柄といえぬところもあろうが、明白に取柄といえるところもあろう。いやしくも多少の独創があれば、この書もまた学界に存在する一分の理由をもつといえる。しかしながらここで私の業績の学的価値、史的価値を云為するのは、私の任ではない、その点では私は読者諸君の公論を甘受する。しかし、その公論の如何に係らず、私自身として欣喜に堪えぬのは、この書の公刊により、幾多の先人に対して私の報本的気持の幾分を果すことを得た点である。

そもそも外国文学専攻の私が明治文学研鑽に十年の歳月をなげうったのは何故か。その第一理由は宿好の致すところという

よりほかはない。しかしそれだけではない、私には漫然とした宿好以上により強いより明白な理由があった。それは、自分が外国文学の翻訳によって永いこと衣食していた関係上、翻訳なるものの如何に労多くして報少ない仕事であるかを知り抜いている、それと同時によく考えさせられたのは、この道における幾多先人たちのなめた苦労がわれらより如何に大きなものであったかということである。私はたびたびそう考えてはこの人々に対して実に同情の念禁じ難いものがあった。しかも創作文学の方では、文学史というものがあって、ともかくも、斯道先人達の労が多少とも記録されているが、普通の文学史では翻訳文学、翻訳文学家の労の如き、一二の特殊な場合のほかには取り揚げてくれない。もし彼らの労を特別に表章するとせば、特殊な翻訳文学史を書くより仕方がない。よし、それではそういう翻訳文学史を書いて彼等の労苦に報うてやれ、私の同情なり報本的な気持なりは、遂にそういう具体的な形をとり始めた。この事はまた、明治文学史研究の上からいっても意義がある、明治の社会が、その初期において一見西洋文明模倣の世界であったように、明治の文学史も、その初期においては、大体外国文学の翻訳移入史にほかならぬといえるからだ。『明治初期の翻訳文学』の誕生は、実にこの一念に由来している。

したがって私は、この書において、能う限り多くの翻訳文学書と翻訳文学者を伝えることを努めた。読者は或いはいささか繁雑の感を催すかも知れない。しかし、これは私の著作動機からいって、そうならなくてはならぬのだ、もちろん私は古籍を多く伝え、古人を多く語っただけで、それで立派な翻訳文学史だとするものではない。しかしかく古籍を伝え、古人を語るその事が、立派な文学史を生む因子とはなり得る。私としては、私の伝えた結果が無意義でなければ、それで満足である。

私の最初の立案によれば、単に「翻訳文学史」だけでなく、むしろ時代的にも資料的にももっと浩瀚整備した「西洋文学移入史」をまとめ「翻訳文学史」をその一部分たらしむるつもりであった。しかし私の経済的微力のために遂に一応主題を「翻訳文学」だけに限らざるを得なかったのは、遺憾といえば遺憾である。私は他日、この書の姉妹篇として『明治初期西洋文学移入史』をぜひ書き上げたいと思っている。

思うに、私のこの書に伝えられた翻訳文学書、翻訳文学家のうちには、私の書物が書かれずとも当然伝わるべき運命のものも若干はあったろう。しかしながら、それらの書、それらの人といえども、この書の出たことによってその後世に伝わる可能性をさらに幾分確実ならしめたことは事実であろう、いわんやこの書の出現によってのみ伝えられる翻訳文学書、翻訳文学家も若干はあるにおいておや。私の欣喜に堪えぬところは、一にこの点にかかっている。古ローマの詩人テレンスは歌って曰く Homo sum : humani nihil a me alicuum puto(我は人なり、人に相応わしき事は何事にても余所事と思われず)と。昔のテレンスの気持は大いに今の私の気持でもあるのである。

昭和十年二月

柳田泉

目次

はしがき……一
（附）序（昭和十年初刊本）……四

I 研究篇 ―主として歴史的―……一

明治初期の翻訳文学
―明治翻訳文芸史研究手引草―……三

1 明治翻訳文学の最初。初期翻訳文学の三変……三
2 『花柳春話』以前の初期翻訳文学。―第一期……五
3 『花柳春話』織田純一郎。―翻訳文学第二期に入る……二三
4 明治十二年（第二期のつづき）。……二七

5 明治十三年—十四年（第二期のつづき）。……二
6 明治十五年（第二期のつづき）。政治熱と結びつく……二六
7 明治十六年（第二期のつづき）。翻訳意識の進歩……三五
8 明治十七年（第二期のつづき）。本格政治小説……四六
9 明治十八年。翻訳文学再転して第三期に入る。
内容外形併重の風……五八
10 明治十九年（第三期のつづき）。翻訳文学の激増と
その理由……六九
11 明治二十年（第三期のつづき）。翻訳文学の全盛。
英国物と大陸物。森田思軒……八四
12 明治二十一年（第三期のつづき）。翻訳文学漸減。
『あひびき』の出現（第三転の機）……一三
13 探偵小説と黒岩涙香……一四一

14　明治二十二年（第三期より第四期へ）。新陳代謝の機運……一四四

II　論考篇……一六三

翻訳文学研究
—その史的意義について—……一六五

1　序　説……一六五

2　明治十年までの翻訳文学……一六七

3　明治十年以後……一七一

英国文学……一七一

仏国文学……一七九

露国文学……一八四

ドイツ、イタリア、スペインの文学……一八八

日本文学に及ぼしたる西洋文学の影響
—資料を中心にして—……一九〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

1　態　度……一九〇
2　明治以前……一九一
3　明治時代―第一期……一九六
4　明治時代―第二期……二〇六
明治初期の翻訳英国小説（未完稿）……二二五
『花柳春話』　丹羽純一郎訳　明治十一年……二二五
『寄想春史』　丹羽純一郎訳　明治十二年……二二七
『春風情話』　橘　顕　三訳　明治十三年……二三二
戯作中の外来種二三について……二四〇
ドストイエフスキーの日本伝来について……二五二
1　想像と推測……二五二

2 明治初期におけるドストイエフスキー……二五四
3 ドストイエフスキー紹介者内田不知庵……二五五
明治新体詩の先駆
—西周の功績—……二五八
III 沙翁文献篇……二六三
この頃見たシェークスピア文献の二三について……二六五
1 外山博士の『ハムレット』訳について……二六五
2 『春宵夜話』について……二六八
3 『欧洲奇聞花月情話』……二七三
4 『葉武列土倭錦絵』……二七五
私記 明治初期沙翁書志源流……二八一

Ⅳ 伝記篇……二八七

『伝記篇』について……二八九
『暴夜物語』訳者　永峯秀樹伝……二九一
『花柳春話』訳者　織田純一郎伝……二九九
織田純一郎の「素生」及び「海外留学事情」について……三一七
織田氏の翻訳小説『文明の末路』について……三二
川島忠之助伝……三三
『哲烈禍福譚』訳者　宮島春松伝……三三六
「雅楽協会」と宮島春松……三四七
『社会平権論』訳者　松島剛伝……三五八

桑野鋭氏のことども……三七一
『鉄烈奇談』訳者　伊沢信三郎伝……三七七
沙翁物翻訳家三氏……三八三
1　板倉興太郎伝……三八三
2　叢菊野史（仁田桂次郎）伝……三八四
3　竹内余所次郎伝……三八五
聞書三篇……三八七
1　上条信次伝聞書……三八七
2　高須治輔伝聞書……三九〇
3　情態奇話『人七癖』とその訳者森澄徳聰……三九四
井上勤とその翻訳小説
—自伝的資料若干—……三九八

1　井上不鳴翁略伝……三九八
2　井上勤伝……四〇〇
3　井上勤著訳略解……四〇三

森田思軒伝（記稿）……四〇七

余録――（その一）……四一
余録――（その二）……四三
余録――（その三）……四七

同志社教授　山崎為徳先生……四五三

明治初期翻訳文学年表……四六一～四九三

本文索引……一～一六

Ⅰ　書名索引……一
Ⅱ　人名索引……一〇

I 研究篇

—主として歴史的—

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com